

# 極地から地球が見える

南極地域観測事業 第一次越冬60年記念展  
「南極の技術60年の創造力―技術屋は、実現の困難とたたかうためにいる」  
関連イベント お話会

南極と似ているようで大きく違うのが北極だ。温暖化の影響が地球上で最も顕著に現れる場所のひとつ。グリーンランドの氷は年々とけて減り続けている。海や生態系、先住民の暮らし、さらに異常気象など全地球的な気候へも影響は及んでいく。

南極や北極は、地球環境の太古から今、そして未来を私たちに語りかけている。極地から地球が、そして宇宙が見えてくる。

南極大陸の海岸には約40億年前の岩石が姿を見せ、南半球の大陸が一つだった Gondwana 大陸の痕跡に出会える。地球の歴史を感じる南極だが、見上げればオゾンホールが開き、温室効果ガスの二酸化炭素濃度は上昇、地球環境の変化が表れている。昭和基地から千キロ離れた内陸にあるドームふじ基地。最低気温-79.7度の地で観測隊は、深さ3035メートル、72万年前の氷を掘り出すことに成功した。閉じこめられた太古の大気から地球の気候変動がみえてくる。隕石探査では日本は世界トップを走り、1万7千400個以上の隕石を集めてきた。太陽系誕生の謎を探る手がかりとなる。

日時：平成29年8月20日(日)  
13:00~14:00  
場所：西堀榮三郎記念探検の殿堂  
講師：中山 由美氏(朝日新聞社会部記者)  
定員：30名(先着順)  
参加費：無料  
※別途、入館料が必要です。  
東近江市民は無料！

同日開催

参加費 **無料!!**

大型雪上車・内部見学会

①10:00~12:30

②15:00~16:00

南極の氷の音を聴いてみよう!  
12:30~13:30



中山由美さん

## Profile

千葉県生まれ  
朝日新聞社会部記者  
南極へ2回、北極へ5回、パタゴニアやヒマラヤの氷河も取材し、地球環境を探る“極地記者”  
青森支局、つくば支局、外報部、科学部、特別報道部を経験。外報部時代に、2001年9月11日の同時多発テロ実行犯の生涯を追って、ドイツや中東を取材。長期連載「テロリストの軌跡」(2002年度新聞協会賞受賞、単行本は草思社)を担当した。  
2003年11月~2005年3月、女性記者で初めて南極観測隊に同行して越冬した。  
45次隊では、昭和基地から雪上車で1カ月、1000キロ遠征し、マイナス60度のドームふじ基地に暮らし、氷床掘削を取材した。  
2009年11月~10年3月、51次隊で南極を再訪。セールロンダーネ山地学調査隊と氷上で40日間暮らし、報道で初めての隕石探査の取材に成功した。  
北極・グリーンランド訪問は5回。  
2008年夏に米国観測チームに同行、12年夏と14年冬は日本の研究者による氷河や海氷の観測、15年春はエスキモーの犬ぞり猟に同行取材した。16年1月にはノルウェー北部のスパルバール諸島など取材。  
2011年3月の東日本大震災では岩手など津波被災地で半年、取材。岩手や福島で潜水取材をした。  
連載「プロメテウスの罠」(2012年度新聞協会賞、早稲田ジャーナリズム大賞)ではシリーズを4回担当。放射能観測が妨げられた実態を暴いた「観測中止令」は科学ジャーナリスト賞2012を受賞した。

<著書>

「南極で宇宙をみつけた!」「こちら南極 ただいまマイナス60度」(草思社)、共著で「テロリストの軌跡」(同)、「南極ってどんなところ?」(朝日新聞社)、「プロメテウスの罠」(Gakken)など。